

みどりのこえ

御嶽山とその裾野に広がる
火山山麓扇状地

2025
秋号
No. 71

発行 長野県環境保全研究所

令和7年(2025年)10月15日

編集 長野県環境保全研究所 自然環境部(飯綱庁舎)

〒381-0075 長野市北郷 2054-120

TEL.026-239-1031 FAX.026-239-2929

E-mail:kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp

土が語る開田高原の歴史

信州には数多くの火山があります。その中でも御嶽山は、数十万年にわたって活動を続けてきた第四紀の火山です。その麓には、過去の大規模噴火による火砕流や土石流などが幾重にも積み重なり、広々とした平らな大地(火山山麓扇状地)が形づくられてきました。開田高原は、その大地の上に位置し、古くから人々の暮らしの場となってきました。



黒ボク土の断面(開田高原管沢)

この高原で地面を少し掘ってみると、真っ黒な土が現れます(左写真)。うっかり服につけばなかなか落ちない、炭のようなこの土は「黒ボク土」と呼ばれます。黒ボク土は日本列島を代表する火山灰土壌です。その形成には、火山噴出物に由来する特殊な粘土鉱物の存在に加え、ススキやササなど草本植物からもたらされる豊富な腐植が必要です。

本来、日本のような温暖湿潤な気候では森林が広がるのが自然の姿です。では、なぜ黒ボク土が広く発達してきたのでしょうか?その背景として挙げられるのが、人々による火入れの役割です。開田高原でも古くから火入れが行われ、草原が維持されてきました。こうした半自然草原は、希少な草地性の植生や昆虫からなる地域固有の生態系を育むとともに、黒ボク土の生成にも深く関わってきた可能性があります。

最近の研究により、開田高原の黒ボク土の形成年代が測定され、その結果、この土壌は約7,600年前、縄文時代早期にはすでに生成を開始していたことが示唆されています。今後、黒ボク土に関する研究がさらに進展すれば、火山、植生、土壌、そして人々の営みが互いに結び付きながら積み重なってきた、開田高原の歴史がより鮮明に浮かび上がってくることが期待されます。

開田高原の大地に広がる黒い土は、自然と人との長い歴史を物語っているのかもしれません。

文・写真 葉田野 希 はたの のぞみ
新潟大学理学部・准教授



Contents

【巻頭言】土が語る開田高原の歴史

(葉田野希/新潟大学理学部准教授)・・・ 1

【特集】開田高原 ・・・ 2～5

【Report】施設公開・親子環境講座 ・・・ 6

【Report】自然ふれあい講座(セミのぬけからを探せ!2025)実施報告 ・・・ 7

【スタッフ紹介】 ・・・ 8

2024年度北アルプス南部地域におけるライチョウ調査結果 ・・・ 9

長野県希少野生動植物保護回復事業のその後 ・・・ 10

【適応センター通信】 ・・・ 11

【お知らせ】令和7年度のイベント予定 ・・・ 12